

国語 試験問題

二月十日実施

注 意

- 一、試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二、問題は余白をふくめ、十八ページにわたっています。
- 三、試験時間は五十分間です。
- 四、答えはすべて解答用紙の決められた欄に記入しなさい。

京華高等学校

受験番号

氏
名

余
白

問題は次のページから始まります。

余
白

一、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

中学生男子百メートルの県記録を更新した中三の夏の大会、その競技会場でのことだった。自分の出番が終わり、しかもベストタイムを出すことができて、そう、確かにあの時はいい気になっていた。フィールドに隣接した施設で休憩を取っていた時、速水と口論になったのも自分が原因だった。そこに悪意があったかと訊かれれば、なかったのだ。だがいつそ悪意があったほうがまだマシだったんだろう。そんなものがなくても相手が一番傷つく言葉を平気で吐くくらい、あの時の自分は傲慢だった。

(中略)

『おまえのそういうところがずっと嫌だったんだよ』

左の鎖骨のあたりをドンと押されて、バランスを崩した。その後、何度も何度も考えることになる。あそこが階段のすぐそばではなかったら。自分が踏みとどまっていたら。何かつかまるものが近くにあったら。速水が、とっさに伸ばした自分の手握ってくれたら。

でも、現実の自分は、真逆さまに階段を落ちていった。

頭を打って脳震盪(のうしんどう)を起こしたから、残っている記憶は断片的だ。ただ、自分の左膝の内側でブツンと組織が千切れる音をはっきりと聞いたことと、脳みそをめった刺しにされるような激しい痛みだけは覚えていて。

意識を失っている間に搬送された病院で、脳のCT検査だとか左膝の保存治療だとかが行われ、目が覚めるとベッドのわきに母親が硬い表情で座っていた。母は「私が余命宣告を受けたら絶対に包み隠さず話さないよ」と息子に言いつける人だから、息子にもオブラートに包むことなく正確に診断結果を伝えた。左膝の前十字靱帯(じんたい)が断裂し、半月板も損傷していること。走者としての今後を考えるなら、靱帯の再建手術を受けるべきであること。その手術を受けてもどこまで回復するかは今の段階では何とも言えないこと。ただ、少なくとも手術とリハビリを含めて一年、あるいはそれ以上のブランクが空くのは避けられないこと。

けがをした直後のほうが、まだ冷静だった。もちろんそれは冷静なつもりでいただけなのだが、少し時間が経たって自分の身に起きたことを理解してからのほうが精神は荒れた。特待生待遇での推薦が内定していた萩丘高校から探りが入って、今後の回復次第では推薦の内容を変更するか、取り消すかもしれないと言われてからは、荒れに荒れた。

面会がゆるされるようになると陸上部の顧問がやってきた。とにかく今はけがを治すことだけ考えろ、絶対にまた走れるようになるから、と諭す顧問の隣で、速水はずっとうつむいていた。ほら速水、と顧問に促されてからやっと、憔悴^{しょうすい}しきって別人みたいになった顔を上げた。

速水は、ただ黙って、額が膝につくほど深く頭を下げた。

ごめん、とか、具合はどうだ、というような言葉も一切なかった。あれくらい避けられないおまえがドジなんだ、とか、あんなことを言ったおまえが全部悪いんだ、とか、そんなことでもいいから何か言ってほしかった。でも速水はいつまでも背中をまるめて頭を下げたまま動かなくて、急にパリンとガラスが割れたみたいに、全部わからなくなった。

俺は今まで何をやってたんだ？

速く、速く、誰よりも速く走って、それがいったい何になるんだ？　そうやってほかの全部をないがしろにしてやってきたことの結果がこの状況なのだとしたら、それは、なんて下らないのか。そんなことに十五年の人生の大部分を捧^{ささ}げてきたのか。なんて——アホらしい。

それからは一転、手負いの獣¹みたい荒れていた気持ちには、どろどろの重油の表面みたいにぴくりとも波打たなくなった。何もかもが薄紙一枚を隔てた向こう側にあるように味気なく、もう走れなくなるかもしれないと思うたびにこみ上げていたあれだけの恐怖も、誰かほかの人間の事情^{しじやう}みたいに思えた。

『金なんざどれだけ掛かったってかまわないわよ、受けなさい』と母親に胸ぐらをつかんで凄^{すご}まれたので、靱^き帯の再建手術だけは受けたが、日ごとに傷が回復し、リハビリを重ね、動かなかった足がじよじよに元に戻っていくのと引き換えのように、走りたいという気持ち^{きもち}は失^うせていった。受験が差し迫る冬の頃には、井戸の水が涸^かれ果てるように、憧^{あこが}れも情熱も生まれた意味を悟る瞬間に焦^{あせ}がれる思いも、一滴残らず消えていた。

それでも退院して学校に復帰した日、速水に会うために、陸上部の部室に行ったのだ。もう手遅れだとは思^{おも}う、けどあの日に自分が言ったことを謝^{あやま}りたくて。

けれどチームメイトに、速水がずいぶん前に退部したことを知らされた。

その足で伊澄は顧問のもとへ行き、陸上部を退部すること、スポーツ推薦も辞退^{しだい}することを伝えた。

三年生の時には速水とはクラスも別だったから、その気になれば顔を合わせずに暮らすことは可能だった。廊下で姿を見かけることさえ稀^{まれ}だったから、速水のほうも自分を避けていたんだと思う。

無言で頭を下げ続ける姿を見たあの日以来、速水とは何も話していない。

「その人は、それからどうしたの？」

六花の張りのある声は、雨音の中でも **A** 耳に届く。風景はまだ暗い銀色にけぶっているが、雨が屋根やコンクリートを叩く音はさつきよりも幾分静かになっていた。

*「仙台の私立に行ったって聞いた。それしかわかんないな」

「那須くんがいくら誘っても陸上部に入らないのって、その人のことがあるから？」

六花の口調には下手な気遣いやなぐさめが一切なく、それが却ってよかった。

「駅で泥棒を捕まえた時も、今日の体育の時も、私から見たらチーターみたいに速かったし、けがをしてるなんて全然わからなかった。本当は、もうよくなってるんじゃないの？ その気になったら走れるくらい。それでもそんなに一生懸命やっていた陸上に戻らないのは、本当は、けがのことよりその人のことを気にしてるから？」

「ズバズバくんなあ」

「一回死にかけてから、まわりくどいことはやめたの。人生って思ったより時間がないんだってわかったから」

十代前半にしてそんなことを悟ってしまったから、彼女はやたらと切れ味がよくて潔いんだろうか。身に起きたことから何も学べていないし、悟れてもいない自分とは違って。

「自分でも、よくわからない。だいぶ治ってるのは本場で、でも前と同じようには走れないのも本場で、一番速かった自分に戻れないならもういいって思う。それに、もし陸上部に入って大会とかであいつと顔合わせたらって思うと怖いし、あっちも相当嫌だろうなって思う」

今まであまり意識しないようにしていたことを言葉にするうちに、あいつも同じようなことを考えて陸上をやめているかもしれない、と思い当たった。それは——とても残念でかなしいことだと思った。自分のことは柵に上げて、²彼には今も走っていてほしいと思った。

「走ろうと思えばできるくせに甘ったれンなって、思われるかもしれないけど」

「思わないよ、そんなこと」

六花の目つきと声は鋭いくらいだ。

「私の足のことで、荒谷くんのけがのことは別の出来事でしょ。その人に起きたことの重みは他人と比較なんかできないってことくらい、私だってちゃんとわかってる。せつかく治ったのに使わないなら私にちようだいよ、なんて映画の台詞みた

いなこと言わないし、一ミリも思わないから。見くびらないで」

「すみません」

「以後気をつけて」

「B」顎を反らした彼女の、足代わりである水色の車いすを、伊澄はながめた。

「この前、将来はスタイリストになりたいって言ってたよな。それって、ミュージカル俳優にちょっと近いから？」

「うん。それなら、ステージに立つ人たちに聞かれるかなって」

「車いすでステージに立つことって、できないのか」

彼女は、もう踊ることはできないかもしれない。でも彼女には声がある。取り返しをつかないことをしかした男子高校生、無神経な心すら動かす歌がある。

「できないことはないよ。ハンデを持っていたても、そういう世界で活躍してる人たちはたくさんいる。プロの世界じゃなくても、もっと身近なところでミュージカルが好きな人たちとステージに立つこともできるかもしれない。でも、それは、私が立ち上がったステージじゃない」

静かに、しかし「C」、六花は言った。

「私が立ちたいのは、小さい頃におばあちゃんに連れていってもらった、あのステージなの。夢みたいに楽しくて、キラキラきれいで、でもその裏側では誰もが血を吐くくらい苦しい練習に耐えてる場所。努力の量や気持ちの強さなんて関係なくて、認められた人だけが残されて、そうでなければどんどん切り捨てられていく場所。私が行きたいのはそこだけ」

六花と同じようなことを、自分も以前に言ったことを思い出した。走ることは喜びにならないのかと問う母に、自分はそうではないと答えた。競いながら走り、そして誰よりも速く在ること。それが自分の喜びだった。いい悪いの問題ではなく、自棄^{やけ}になっっているのでもなく、ただ自分が求めてやまないのはそういうもので、きつと六花にとつてもそうなのだ。

運命だと確信するほど彼女が愛したものは、切り立った崖のような場所にある。好きという気持ちや努力を惜しまない情熱は当然で、その上で肉体的にも選ばれた一握りの者しか進めない場所にある。

「だからいいの。ちゃんともう整理はついてる。私はステージに立つ人間じゃなく、ステージに立つ人たちを支える人間になりたい。そう決めたから」

カーテンコールに応える女優のようなあざやかな笑顔に何も言えずにいと、六花が淡い茶色の瞳で空を見上げた。

「雨、やんできた」

伊澄も空を仰いだ。鉛を流したようだった灰色の雲に切れ間が広がっていた。重苦しく垂れこめる雲の、割れ目の縁だけが淡い金色にかがやいて、そこから透きとおった光が幾すじも、細い鎖のように地上に射しこんでいる。

「きれいだね。なんか、あそこに神様がいるみたい」

唇をほころばせた六花は、澄んだ声で続けた。

「『神様は扉を開ける時、別のどこかで窓を開けてくださる』」

「……何それ？」

「『サウンド・オブ・ミュージック』っていうミュージカルの中の台詞。主人公のマリアは修道女見習いなんだけど、あんまり自由奔放でおてんばだから、修道院を出て軍人一家の家庭教師をするように言われるの。最初はしよげてたマリアが、自分を勇気づけるためにこう5 つふや 呟くんだ。リハビリ病院にいた時に映画を観て、それからずっとこの言葉が私のおまもりなの。もう一回全部最初から始めて、私も窓を探そうって思った」

まだ霧のような雨が舞う淡い光の中で、六花はほほえんだ。

「荒谷くんも見つかるといいね。神様が荒谷くんのためにどこかに開けてくれた、窓」

（阿部暁子『カラフル』による）

*那須くん：陸上部に所属している伊澄や六花のクラスメイト。

1.

A
C

 にあてはまる言葉として適当なものをそれぞれ選び、符号で答えなさい。

ア ツンと イ くつきりと ウ きつぱりと エ のんびりと

2. ——— 線部 1 に「どろどろの重油の表面みたいにびくりとも波打たなくなった」とありますが、このときの伊澄の説明として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア けがをさせたことで茫然^{ぼうぜん}自失^{じしつ}になっている速水の様子を見て、これまで自分が感じてきた陸上へのやりがいや目標が消えてしまい、速く走ることでできない自分は誰からも評価されない存在だと思っている。

イ 自分の行いを深く後悔している速水の様子を見て、これまですべてを注いできた陸上への憧れや愛情が消えてしまい、なにもすることができない自分に嫌気がさして生きる意味さえも見出せなくなっている。

ウ 精神的に追い詰められている速水の様子を見て、これまでの自分を形作ってきた陸上への情熱や努力が消えてしまい、今までの自分がしてきたことに価値を見出せずまるで他人事のように思っている。

エ 負わせたけがの大きさに動揺している速水の様子を見て、これまでの自分を支えてきた陸上で得た名声や自信が消えてしまい、脚が治ったとしても修復されることのない自分の価値や速水との関係を悟っている。

3. ——— 線部 2 に「彼には今も走っていてほしいと思った」とありますが、その理由として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 自分がけがを理由に陸上を辞めたことには納得しているが、速水が以前のように走れない自分への気遣いから陸上を辞めていたとしたら納得することができないから。

イ 自分が速水の気持ちを傷つけてしまったことは許されることではないと自覚しており、速水が陸上部として走り始めることを応援することでせめてもの罪滅^{つめ}ぼしとしたいから。

ウ 自分が再び陸上を始めることはできないと考えているが、自分の代わりに速水が陸上を続けてくれていたらきっと自分の思いを継いでくれると確信しているから。

エ 自分がけがをして陸上を続けられないことは自己責任であると自覚しており、速水が責任を感じて同じように陸上を辞めてしまったことに罪悪感を抱いているから。

4. ——— 線部3に「自分が求めてやまないのはそういうもので、きつと六花にとつてもそうなのだ」とありますが、この部分を説明した次の文章の I・II にあてはまる言葉を探し、それぞれ指定字数で抜き出さない。また、III は本文中の言葉を用いて六十字以内で答えなさい。

伊澄が求めているものは I (八字) ではなく、同様に六花が求めているものはただ単に II (九字) ではない。 両者が求めているものは III (六十字以内) であるということ。

5. ——— 線部4に「カーテンコールに応える女優のようなあざやかな笑顔に何も言えずにいる」とありますが、ここでの伊澄と六花の説明として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 自分と六花の間に共通の不安があることを理解しつつも、目標を諦めることなくひたむきに努力する彼女の姿を目の当たりにして、自信を持てずにいる自分との差を感じている。

イ 自分と六花のこれまでの境遇に共通のものを感じつつも、新たな目標に向けて進むことを決意した彼女の姿を目の当たりにして、前に進めていない自分との差を感じている。

ウ 自分と六花のこれまでの境遇が似ていることを認めつつも、葛藤する姿を見せることなく役者のように演じる彼女の姿を目の当たりにして、彼女に対して憧れを抱いている。

エ 自分と六花が共通の悩みを抱えていることに気づきつつも、強く生きることを決意した前向きな彼女の姿を目の当たりにして、彼女に対して言葉にできない尊敬の念を覚えている。

6. ——— 線部5に「私も窓を探そうって思った」とありますが、六花が見つけた「窓」にあたるものを三十字以内で答えなさい。

7. 本文の特徴を説明したものとして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 伊澄の視点で物語を展開することで、伊澄と速水の不安定な心情が印象的に描かれている。

イ 伊澄の回想を挿入することで、伊澄が昔のように走りたいと葛藤する心情が描かれている。

ウ 「雨」や「雲」に関する表現を用いることで、伊澄の心情の変化を暗示するように描かれている。

エ 会話文を中心に物語を展開することで、伊澄と六花の揺れ動く心情が象徴的に描かれている。

8. この文章の登場人物の説明として適当なものを二つ選び、符号で答えなさい。

ア 伊澄は、自分のけがの大きさを理解したことで、大好きな陸上を諦めて他人に対して心を閉ざしてしまった。

イ 伊澄は、けがを負ってこれまでの努力が無意味であったと思い、さらには自分自身の思い上がりに気がついた。

ウ 伊澄は、思い出したいくない過去を語り振り返るなかで、自分自身の犯した過ちに少しずつ気づきはじめた。

エ 六花は、表面上は気遣いや慰めを口にしないが、実際は人の弱さを知るからこそその思いやりにあふれている。

オ 六花は、自身の過去に対する深い後悔があるため、どのような困難にも言い訳をすることなく努力を惜しまない。

カ 六花は、自分の気持ちに沿って行動することを大切にしており、自分の考えをはっきりと伝えることができる。

二、次の文章Ⅰ・Ⅱを読んで、あとの問いに答えなさい。

【文章Ⅰ】

本書のテーマである記憶は、¹ AIがもつとも得意とする分野です。AIの場合、どれだけ膨大な量の情報であっても、そのままの形で完璧に蓄えることができます。しかも、たとえ何年たっても好きなときにもそのままの形で引き出すことができます。これに対して、人間が覚えることのできる情報量はAIの足もとにも及びません。たとえば、誰もが学校のテストで経験するように、苦勞の末、たとえ何とか暗記できたとしても、テストの翌日にはほとんど忘れてしまっていたのではありませんか。そんな私たち人間とAIの決定的な違いは、私たち人間の記憶力の貧弱さです。たとえば、学校の授業や職場などで同じ話を何人かの人間が聞いた場合、その直後であっても各人が覚えている内容は一人一人バラバラで不正確なものが多く、もとの内容とは似ても似つかない形で思い出されたりします。この記憶の不正確さが、人間社会の数多くのトラブルのもとになることには、誰もが思い当たるふしがあるはずです。言うまでもなく、AIにはこのような記憶の不正確さといったことは起こり得ません。

このような私たち人間の記憶力の貧弱さから考えれば、記憶についてはすべてAIに任せてしまつて、私たち人間は記憶からの解放を目指したくなります。実際、今では誰もがスマートフォン(スマホ)を所有し、うろ覚えのことやわからないことはすぐにインターネットで検索して簡単に調べることができます。また、各種イベントの開始時刻や病院の予約時間といった予定なども、スマホに覚えさせることがふつうになります。さらに、日々の出来事や旅行先での思い出といったものさえ、スマホを使えば写真はもとより動画として正確に記録しておくことも手軽にできるようになっています。それどころか、ライフログという名前で知られているように、個人の全人生を完璧な形で記録することすら可能です。ビジネスの現場で業務の外部委託を意味するアウトソーシングという用語を使うのならば、このような状況は記憶のアウトソーシングと呼ぶことができます。今後、この記憶のアウトソーシングの度合いがますます加速されていくのは間違いないでしょう。

これまででは、学校のなかであれ職場のなかであれ、少しでも多くの知識を自分の内部に記憶として蓄えることに価値が置かれてきました。そのため、人よりも多くの知識をもった者が、さまざまな場面で有利となり活躍できる場も多かったのではないのでしょうか。A、記憶のアウトソーシング社会では、そのような知識の大部分はインターネットをはじめとした外部の世界に蓄えられるようになり、誰もがそれらを自由に利用できるようになるはずです。そうなると、今までのような個人の内部に蓄えられる知識の多い少ないは、もはや価値をもたなくなるように思うかもしれません。

はたして本当にそうなのでしょか。誰もが記憶のアウトソーシングに依存する社会になれば逆説的に聞こえるかもしれませんが、そのときこそ個人の内部に知識として蓄積された記憶がいつそう重要なものになります。誰もが認める創造性あふれる天才画家であったパブロ・ピカソの有名なことばに、「コンピュータは役に立たない。コンピュータが与えてくれるのは答えだけだ」というのがあります。この「コンピュータ」ということばの代わりに「記憶のアウトソーシング」を入れて、「記憶のアウトソーシングは役に立たない。記憶のアウトソーシングが与えてくれるのは答えだけだ」とすれば、記憶のアウトソーシングだけに依存する問題点が浮き彫りになるのではないでしょか。そもそも個人の内部に蓄積される記憶は、個人ごとに量的にも質的にもまったく異なっているものなのです。そして、これらの記憶こそが私たち一人一人の個性を作り上げ、さらには創造性の基礎になるというのが本書の立場です。

【文章Ⅱ】

いつの時代でもどのような分野（発明や科学的発見など）であろうと、創造性（クリエイティビティ）は重視されてきました。近年のAIの驚異的な進展によって、私たちの創造性はますます重要なものとなってきています。ひと言で創造性と言ってもその定義は無数にあると思われますが、少なくともそれまで誰もが思いつかないまったく新たな解決（方法）を発見するという点では合意が成立するでしょう。けれども、発見するためには発見されるものが存在しなければなりません。アップルの創業者の一人スティーブ・ジョブズは、かつてインタビューで、すでに存在していた物事を関連づけることこそが創造性だと言っています。そして、創造的な人々はみなそれまでの自分の経験をつなぎ合わせて新しいものを作り上げたのであって、発見までのプロセスは本人にもあとからしかわからないのだそうです。

Ⅱ（中略）

ポアンカレは数学の難問の解決（方法）に長い間取り組んでいました。連日の疲れもあり深い眠りにもつけないまま、うとうとした状態のときにいくつかの考えの群れが勝手に思い浮かんだと言います。B、それらが互いに衝突し合って、そのうちの二つの考えが安定した組み合わせになり、ひらめきが生まれました。そのあと朝までには問題の解決が大きく前進したのです。さらにまた別のときに、ポアンカレは苦労に苦労を重ねてもう少しで解決できるという仕事からいったん離れることになりました。どうしても用事で旅に出かけなければならず、この仕事のこととは忘れていたと言います。ところが、乗合馬車に乗りうとした瞬間に突然、難問の答えがひらめいたそうです。

（中略）

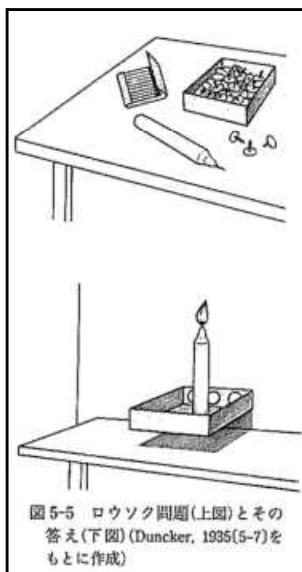
このように、ポアンカレも湯川も、問題の解決に没頭し続け、そこから一旦離れた状態になったとき新たなアイデアがひらめいています。チンパンジーにも一種のひらめきに似た行動のあることを発見したドイツのある心理学者は、自身の経験でひらめきが生じるのが入浴中とかひげをそっているときなど問題の解決に意識的に関与していないときであると述べています。そして、スコットランドの著名な物理学者から聞いた話として、ひらめきが生じる三つのBを紹介しています。三つのBとは、乗り物のバス(Bus)、風呂(Bath)、ベッド(Bed)です。また、東洋に目を転じると、一世紀の中国の政治家で詩人でもある欧陽脩という人物は、ひらめきが生じるのは「三上」であるということばを残しています。三上とは、「馬上」「枕上」「厠上」のことで、それぞれ馬に乗っているとき、寝ているとき、トイレにいるときにひらめきが生じやすいと言われています。いずれにしても、意識的な集中や努力から離れている状態のときにひらめきが起こりやすいようです。

では、なぜ意識的に集中しているときにひらめきは生じないのでしょうか。その理由の一つは、解決に集中するあまり、問題を一面的にしかとらえられなくなっているからだと思われます。図5-5は、そんな一面的な構えを調べるためのロウソク問題と呼ばれるものです。解決しなければならぬ問題は、この上図にある材料だけを使い、火をともしたロウソクを壁に固定するというものです。この問題を考案した心理学者によると、正答できたのは七人中三人(四三%)だけだったということでした²。私も六〇人ほどの心理学の授業で、毎年、これと同じ問題を女子学生に解かせていたことがありますが、おおむね正答率は六〇%前後でした。

この問題の正解は下図にあるように、まず画鋲を箱からすべて取り出して、その箱を画鋲で壁に固定し、マッチで火をともしたロウソクの台として使うことです。この問題が難しいのは画鋲の箱を画鋲を入れるものというように一面的にしか見ることができず、本来の用途以外の使い方に気づかないことが原因と言われています。事実、この問題を考案した心理学者が事前に画鋲を箱から出しておく、別の七人の協力者は全員正答できました。

このロウソク問題は正答が一つなので、創造性のような正答のない問題とは同一に論じることができませんが、ひたすら問題だけに集中することのマイナス面をあらわしていると思われる。

意識的に集中しているときにはひらめきが起こらないもう一つの理由は、解決に集中している場所が関係していると考えることができそうです。こと何かを考える場所は、書斎にしる仕事場にしろ、いつもほぼ同じ場所であるのがふつうです。第1章で紹介した連合主義者のロックは『人間知性論』(一六八九年)という著書のなかで、場所と記憶との面白い結びつき



について書いています。それはダンスを習った青年の話です。この青年がダンスを練習した部屋の片隅には、たまたま古いトランクが置かれていました。そのため、彼はその部屋では見事にダンスを踊れるようになったのですが、トランクがないとうまく踊れなかったというのです。この理由として、ロックはトランクの置かれた部屋とダンスという体の記憶が強く結びついてしまったからだと考えました。

私たちも自分が生まれ育った場所に何年かぶりで行くと、その頃の思い出があふれ出してくるという経験があるはずです。これもまた、場所と思い出（記憶）との結びつきの一例です。C、先ほどのロウソク問題の一面的な構えと同様、いつも同じ場所にいると同じような記憶や考え方しか浮かんでこないものなのです。

³ このことは俳句を作る人たちにはよく知られていることです。だから、ふだんとは異なる場所に出かけて俳句作りをする吟行というものが盛んにおこなわれているのです。

（中略）

何らかの問題の解決に意識的にかかわったあと、いったんそこから離れた状態でひらめきが起ることが多いのはなぜなのでしょう。おそらく徹底的に考えつくしたあと、そこから離れることで無意識に沈んでいる連想のつながりが意識に浮かび上がりやすくなるのかもしれない。ここで重要なことは、当該の領域に関連した膨大な知識をもとに徹底した意識的な思索をおこなっておくことがひらめきをもたらすということだと思います。ひらめきが無意識の記憶内での連想に関与しているかどうかは、今のところまだ実証できないにしても、連想に関して断言できることがあります。私たちは誰もがみな生きていくなかで様々な人々と交流をもち、成功や失敗、喜怒哀楽といった感情をもちながら、一瞬一瞬、人生の経験を積み重ねてきています。これら人生の経験は一人として同じものはありません。この人生経験の違いこそが無意識の記憶と合わさって、個人特有の連想傾向を生み出すのです。

（中略）

私たちは記憶の蓄積という点でAIに勝つことはできません。おそらく今後は古今東西の全世界の知識やネット空間に発信される情報がAIに集積されていくことでしょう。そして、そういった膨大な情報量をもとにAIも自由に連想を生み出すようになるはずです。けれども、⁴そこには私たちと違って、本質的には何一つ独自性は見られないでしょう。なぜなら私たち一人ひとりの記憶や知識や人生経験の違いに根ざした、無意識のはたらきである連想の独自性というものは、AIには絶対に真似のできないものだからです。そのような意味で、私たち一人ひとは誰もがみな創造性にあふれた存在なのです。

（高橋雅延『記憶の深層——〈ひらめき〉はどこから来るのか』による）

＊湯川：物理学者、湯川秀樹のこと。中略部の中で例が紹介されている。

＊〔5―7〕：出典書籍巻末にある注番号。

1.

A

C

 にあてはまる言葉として適当なものを選び、それぞれ符号で答えなさい。

ア　そして　　　イ　ただし　　　ウ　けれども　　　エ　つまり

2. ――線部1に「記憶は、A・Iがもつとも得意とする分野です」とありますが、筆者がそのように述べる理由として、
てはまらないものを一つ選び、符号で答えなさい。

ア　一度学習したことを長い期間にわたって完璧に残しておくことができるから。

イ　煩雑な情報であっても正確に系統立てて処理することができるから。

ウ　複雑な内容であっても完璧な形で再現することができるから。

エ　膨大な情報量であっても欠けることなく完全な形で残しておくことができるから。

3. ――線部2「問題を一面的にしかとらえられなくなっている」とはどういうことですか。最も適当なものを選び、
号で答えなさい。

ア　物事を解決する方法を限定してしまい、マイナス面まで考えが及ばなくなってしまうこと。

イ　物事を解決することに執着しすぎて、偏った考え方しかできなくなってしまうこと。

ウ　物事を解決までの道筋を急ぎすぎるために、柔軟な考え方ができなくなってしまうこと。

エ　物事を解決することに追い込まれて、良質な思考プロセスを踏むことが困難になってしまうこと。

4. ——— 線部3に「吟行というものが盛んにおこなわれている」とありますが、その理由として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 普段とは異なる場所に行くことで、これまでの自分に影響を与えていた記憶から離れて新たな発想を得て俳句を詠むことができるから。

イ 生まれ故郷に足を運ぶことで、初心に返るとともに昔の記憶を取り戻しこれまでの経験と結びつけて俳句を詠むことができるから。

ウ 普段とは異なる環境に身を置いて創作から離れることで、見慣れた風景からは得られなかった刺激を受けて俳句を詠むことができるから。

エ いままで自分が訪れたことがない場所を旅することで、そこで得た新たな経験や感情を参考にして俳句を詠むことができるから。

5. ——— 線部4「そこには私たちと違って、本質的には何一つ独自性は見られないでしょう」について、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) 「そこ」が指す内容を二十五字以内で答えなさい。

(2) 筆者が人間には「独自性」があると考える理由を【文章Ⅰ】の言葉を用いて、六十字以内で答えなさい。

6. 筆者の考える「ひらめき」や「連想」の仕組みについて説明したものとして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 問題解決に向けて様々な努力した経験と、これまでの成功や失敗の経験が組み合わせることでひらめきが生まれる。

イ 膨大な知識をもとに行った徹底的な思索と、無意識に抱いている感情が組み合わせることでひらめきが生まれる。

ウ 個人の人間関係や心情から作られる人生経験と、ふとした瞬間のひらめきが組み合わせることで連想が生まれる。

エ 個々人の持っている人生経験や感情と、普段意識することのない記憶が組み合わせることで連想が生まれる。

7. この文章に用いられている例示の効果を説明したものとして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア~~~~線部Ⅰ「ステイプ・ジョブズ」のインタビューでの発言を紹介することで、筆者の意見と対比させて、自らの主張の正しさを読者に説明しようとしている。

イ~~~~線部Ⅱ「ポアンカレ」のひらめきの経験を紹介することで、一つの問題を解決するためには徹底的に集中して考え抜くことが重要であるということを読者に印象づけている。

ウ~~~~線部Ⅲ「ロウソク問題」を図とともに紹介することで、ロウソク問題をイメージしやすくし、この問題が筆者の意見を支える根拠となることを読者に印象づけている。

エ~~~~線部Ⅳ「人間知性論」のダンスを習った青年の話を紹介することで、無意識の記憶と呼ばれるものがどれほど曖昧なものかを読者に説明しようとしている。

三、次の①～⑤の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

① 各階の催事ブース。

② 山麓の美しい風景が広がる。

③ 捕鯨は禁止されている。

④ 関係に綻びが生じる。

⑤ 果実が熟れる。

四、次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

① 厚顔ムチとはまさに彼のことだ。

② 山頂のセイリヨウな空気。

③ 僕の飼い猫はオクビョウだ。

④ 思わずため息がモれる。

⑤ ヒトツボの土地の値段。

余
白